

海洋環境の変化に対応した漁業の在り方に関する検討会
第5回会議 議事要旨

1. 日 時：令和5年5月26日(金) 13:30～15:50

2. 場 所：水産庁中央会議室

3. 出席者：

(1) 構成員：内海委員、大森委員、越智委員、田中委員、宮原委員、山内委員、
山崎委員、和田委員、婁委員

(2) 農林水産省：神谷水産庁長官ほか

4. 概 要：

(1) 取りまとめ(案)について、主な意見は以下のとおり。

(2. 海洋環境の変化の進展の概況)

- ・まき網漁業の不調の原因である悪潮、定置網漁業に問題を起こす急潮についても簡単に触れてもらいたい。

(3. 資源や漁獲の変化とその要因)

- ・サケは、水産機構が行っている個体群維持放流で、民間の増殖放流よりも広い期間に放流を行う中で、従来、生残がいいと思われる時期に放流した稚魚の回帰率が悪いことが明らかになっており、放流時期等が現在の海洋環境とマッチしなくなっている。
- ・サケは、日本海側は漁獲量がよくて、太平洋側がよくないが、最適な条件がどう違うのかが重要。ここで解決策を示せるわけではないが、課題としてあるというのは書いた方がいい。
- ・マダラは、本当に獲れていないのか疑問である。獲っても売れないから獲りに行かないのではないのか。CPUEが資源状態を表しているのか疑問である。コロナの時期のマダイのように、陸での価値のミスマッチで資源豊度を表すデータが低く出てくる可能性があることは記載してほしい。
- ・減少している資源にはタチウオも入るのではないのか。
- ・サバは、個別で記載する必要があるが、問題点として、なぜ獲れなかったのかなど記載した上で、漁場の状況を調べる努力が必要な旨を記載してほしい。

(4. 対応の方向性)

- ・対応の方向性を検討する前提としての昨今の漁業を巡る現状認識及び漁業経営支援の必要性に関しては、水産基本計画を参照する形で取りまとめの冒頭に記載する。

- ・資源評価のために色々なツールを入れてデータの質が上がるなどが書かれているが、それに対応する人がいないと成り立たない。マンパワーには触れていないので、そこにも触れていただきたい。
- ・海藻養殖には人的労力がかかるので、テクノロジーを入れて、人的労力の削減を行うべき。
- ・漁法転換だけでなく、定置漁業に畜養を導入するなどの様々なチャレンジに対して、支援していくということを盛り込んでほしい。ミスマッチの解消などの対応先として、案件を受け付ける窓口について盛り込んでどうか。
- ・養殖業の輸出だけでなく、流通・販売対策を入れるのはどうか。ブランド化やバリューチェーンの構築など、流通・販売対策の強化に取り組む必要がある。

(2) 今後について

- ・本日の意見等を踏まえつつ、本検討会の取りまとめ資料を作成し公表する。
- ・11月頃にフォローアップを行うこととしたいが、予算の概算要求が成立していない中で何をフォローアップするのか、検討する必要がある。
- ・長期的な課題として、
 1. 海況が著しく厳しい状況で、今までの漁法でいいのか考え直さなければならぬのではないか。まき網漁業が直面している悪潮（網を入れられないような潮の状況）など、安全の確保のためにも漁船と漁法の見直しを検討していく必要があろう。
 2. 国際交渉を見直してほしい。どうすれば第3国の公海漁獲を抑えて、第2、第3のサンマが出ないようにするのか真剣に考える必要がある。
- ・不漁問題は長く続くので、今後の体制として、定期的に水産庁と情報共有を行い随時対応していく。

以上